

二つの家には、それぞれ家族写真が寄せ集められた場所がある。

祖母の家には、物置部屋の大きな箱の中に、布地やラミネート加工された大判のアルバムがしまい込まれている。

重厚な表紙を開くと、すぐに祖母が作ったアルバムだと分かった。茶色く変色した子供たちの写真が厚紙に貼られ、その横には我が子の言葉を代弁したコメントが書き込まれている。まるでパッチワークで遊ぶように作られたアルバムからは、初々しい母親の一面が見えるようだった。そして私は、父の幼少期が自分の弟の幼い頃と似ていることや、物置部屋がかつて叔母の子供部屋であったことを読み取っていた。

多胡喜伸さんは、私の高校時代の教師だ。彼の実家の仏間には、見開きにL判写真4枚が収まる、小さめのアルバムが、隅の方に重ねて置かれている。

その中に、色褪せた封筒が一つあった。中には喜伸さんの亡くなった父親である、キヨイチさんの写真が集められていた。海軍の下士官をしていたというキヨイチさんは、終戦後、酒を飲むと時々問題を起こすようになったそうだ。家族に暴力を振るうこともあったらしく、彼の話題になると、多胡家の人々の表情は曇った。

しかし、封筒の中の写真に写るキヨイチさんは、違った印象をしていた。孫と和やかに遊んでいたり、忘年会でふざけている姿、療養中の姿を映したそれらの写真は、これまで聞いていた彼の印象とは乖離していた。

両家族の写真を見るたびに、私は混乱した。そこには人や家が確かに写っているのに、その人について、何も語られていないようだった。

そして、自分の撮った写真や映像を通して、何が見えるのか、考えていた。

多胡喜伸さんの実家に初めて行ったのは、2年前の夏の日だった。喜伸さんは教師の仕事辞めてから、毎週実家に帰省する生活をされていた。「うなぎの肝をお母さんに食べさせてやりたいから、買いに行ってくる。お前は留守番しててくれ。」そう言うと、近所のスーパーに車を走らせて行ってしまった。

家には母親の千代子さんが一人で暮らしていた。彼女は足を悪くされていて、1日のほとんどを窓際の椅子に座り、外を眺めて過ごしていた。私たちは喜伸さんを待つ間、色んな話をした。耳が遠いようで、私の声は彼女にほとんど聞こえていなかったが、自分の生い立ちや、亡くなった夫のこと、息子たちのことを話してくれた。「息子も、一人は死んだんやけどな。」私はそれに「何があったんですか？」と聞いた。彼女は答えずに、しばらく黙って、別の話を始めた。私の声が聞こえていなかったのかもしれない。でも多分、私は彼女の踏み入ってはいけないところに、問いかけてしまったのだと思う。

帰りに千代子さんは、家具につかまり立ちして見送ってくれた。「気をつけて帰るんやで。また来てなあ。」そう言うと、車が見えなくなるまで窓の外を見つめていた。

3年ほど前、祖母が心臓の手術をした。それ以来、親戚が彼女の家を訪れるようになっていた。

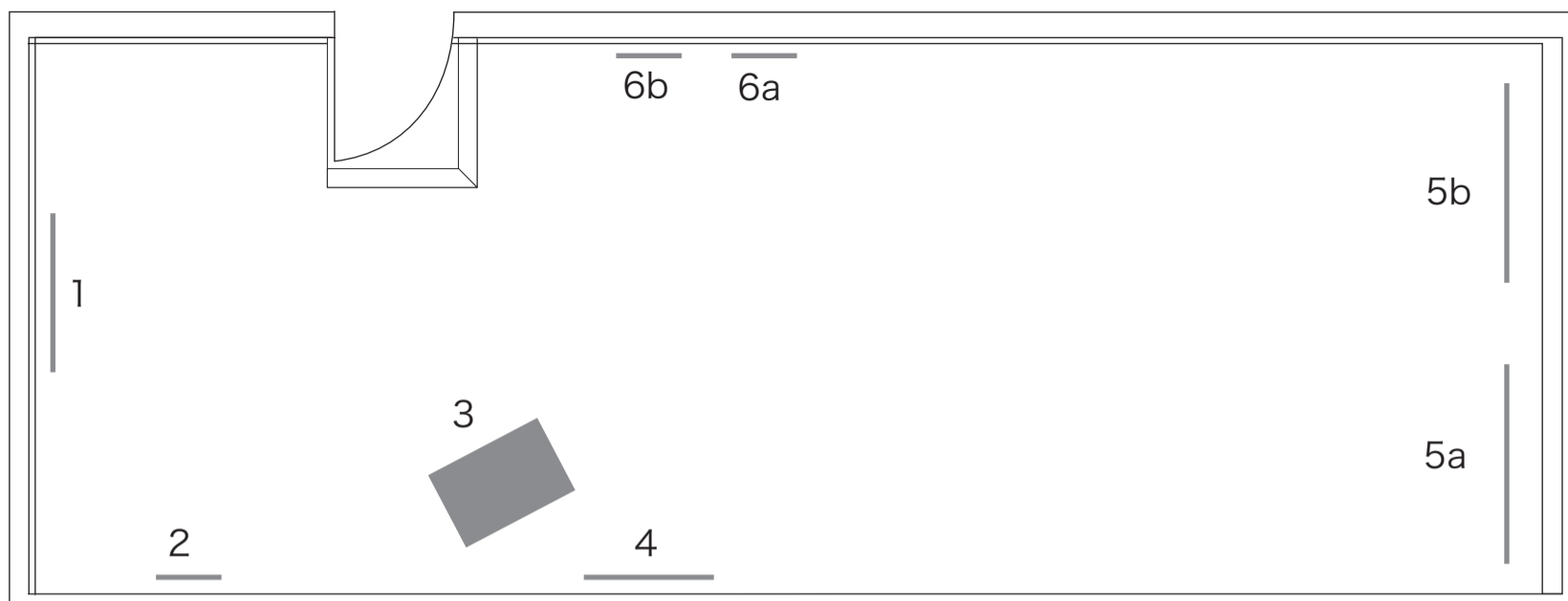
「まあ、上がりいや。紅茶でも飲もか。」玄関先で私を迎えると、祖母はキッチンへ移動してポットで湯を沸かし始めた。

祖母は、淹れた紅茶を飲みながら、庭先に植えた花が咲いたことや、彼女の出身地である伊勢市の話をした。そうした何気ない会話をして、ふと気づくと、亡くなった祖父の話をしていることがある。家は、そこには居ない人を想起させる場所だと思う。死者だけでなく、昔の母や、幼い頃の息子の印象が思い起こされ、会話の中に現れては消えていく。

ティーバックを3回ほど使いまわして、薄くなった紅茶を飲み干すと、祖母は少し疲れた様子だった。「茜ちゃん、昼寝して行きや。おばあちゃんもするさかい。」そう言うと、祖母は仏間のソファで眠ってしまった。

家族について話していると、傷跡が見えることがある。その多くは、笑い話や沈黙の中に埋もれてしまう。そこには、私にはまだ分からない痛みが多くある。しかし、彼らが実感を持っていることはよく分かるのだ。

家族には互いに負い、負わせた傷がある。そしてその傷跡が、私たちを否応なく繋ぎ止めているのだと思う。



1 見えなくなった山の話 (5分25秒)

2 抜け道

3 写真

4 千代子さんの話

5a 繋 多胡家 (47分16秒)

5b 繋 白井家 (47分16秒)

6a 家の中の写真

6b 家の中の写真

上映時刻 (目安)

11:00-

11:50-

12:35-

13:20-

14:10-

14:55-

15:40-

16:30-

17:15-

18:00-